

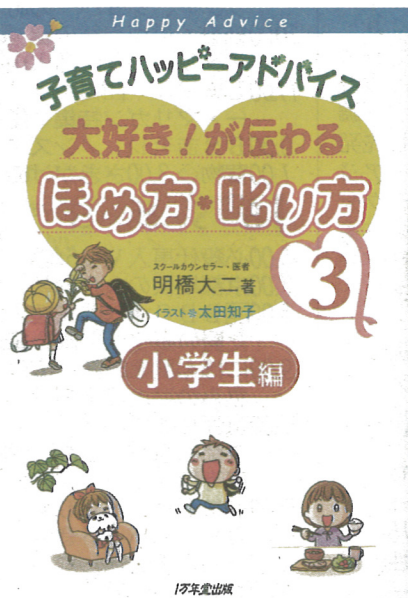
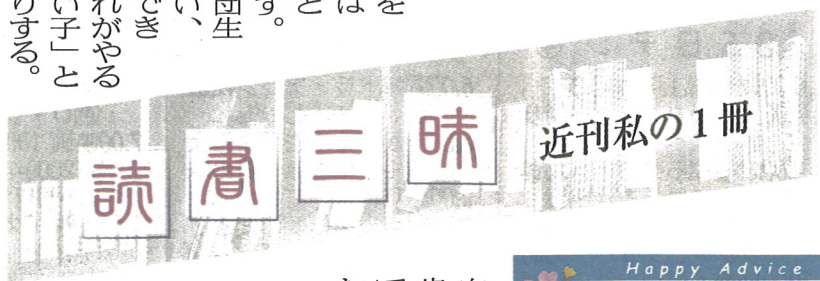
本書は、精神科医が著した人気育児書「子育てハッピーアドバイス」シリーズの最新刊です。小学2年の長男(7)の子育て中で、書名にある「小学生編」の文字にひかれ手に取りました。

ばらママでは昨年秋から母親の社会参画・復帰に役立つセミナーを開いていて、子育てコーチングも学習しました。ある程度のことばは理解しているつもりですが、医師の考え方を知り、自分に生かせるものがあればと読み進めました。

このシリーズ本はこれまでも目にしており、著者は「子どもの自己肯定感を育む」ことを力説しています。「自分は大切な存在だ」「生きる意味がある」という心の土台を、ほめて育てるわけです。

親は子どもが通学を始めると、集団生活で社会性を身に付けたいといけなく、テストは100点をなどと考え、できなければつい叱ってしまいます。それがやる気の芽を摘み「自分はダメな子、悪い子」と子どもが自信をなくしたり、キレたりする。「手のかからない、いい子」は、我慢がいつか爆発する恐れがあるそうです。

日本では欠点を指摘し、直そうとする傾



向にありますが、できない子は叱られると自己肯定感を失いかねません。そうではなく、欧米で見られるように長所をほめて伸ばせば、苦手な面も克服するという。私も同感ですね。

長男は3年前から英語塾に通っていて、先頃スピーチコンテストがあったのですが、出場を見送りました。人前で話すのが苦手な上、負けず嫌いで1位になれないと嫌だったようです。

親としては、モジモジしていた1年前よりははっきり話せるようになり、挑戦してみればとも思いました。が、無理やり出場させて英語自体が嫌いになってはと言葉をのみ込みました。半面、字はきれいでノートを先生にほめられているので、書くことが

大人社会にも参考になる

ら話すことに得意分野が広がればいいと見守っています。

食への好き嫌いも同様です。長男はホウレンソウや小松菜、みそ汁が嫌いです。が、学校では食育でバランスの取れた給食を食べています。成長とともに好みも変わるというから、今はこれでいいかなと考えています。

印象に残ったのは、親がストレス解消の手段として叱っていないかという点。私も、長男が宿題を遊びから帰ったらすると言いながら、帰っても寝てだらだらするので「約束破りじゃがんと叱る。」「子どもには遊びが仕事」と分かっているけど、仕事や家事に追われて言い過ぎる時があり、後で声を掛けてフォローしています。「母親は心に余裕がないといけないなあ」と反省させられます。

漫画で分かりやすく事例を紹介してあるので、ほめて育てる基本を再認識でき、大人社会にも参考になる一冊です。ただ、ほめると凶に乗る人、叱られて奮起する人もいるから、各人の性格に合わせ応用する裁量が大事。私も試行錯誤しながら、個性を生かした子育てに励みたいですね。

(談) 聞き手・大立貴巳



目ライフ

火ブツク

本シネマ批評

本カルチャー

金週末ガイド

土グルメ

ふじい・やよい 岡山市生まれ。関西外国語大スペイン語学科卒。アパレルメーカー勤務、児童英語講師などを経て昨年8月、NPO法人「輝くママ支援ネットワークばらママ」を設立。第8回ばらママフェスティバルが28日前10時～後3時、同市中区桑野の岡山ふれあいセンターで開催、マッサージ、子ども用品交換、手作りパンの販売などがある。